米欧亜回覧

第８５号
発行
特定非営利活動法人
米欧亜回覧の会
編集委員会

年次総会開催
新副理事長、新理事を選任
新しい年度は、二十名の理事・幹事体制でスタート

平成二十八年度通常総会が去る五月二十四日（水）午後一時半より日比谷図書文化館の四階小ホール（スタジオプラス）で開催された。

泉三郎代表より昨年十二月二日～四日の三日間にわたって開催された当会の設立二十周年記念のグランドシンポジウムについて成功裡に終了したことの報告と、芳賀徹先生、保阪正康先生、五百旗頭真先生ほか参画いただいた講師の先生方、関係者に謝意の表明があった。

役員の新任として、理事の塚本弘氏が副理事長、新任理事に小野博正氏と岩崎洋三氏が承認され、再任を含む七名の役員と、十三名の幹事を含めた新しい陣容が固まった。

（詳細は二・三・四頁参照）

年次総会（5月24日日比谷図書文化館）

年次総会第二部はブンブンミーティング

総会議事終了後の休憩を挟んだ第二部として、当会設立時に度々実施されていた、ブンブンミーティングが久々に行われた。歴史部会、グローバルジャパン研究会、英書輪読会とメディア委員会の四つの少人数グループに分かれて議論を行い、会の問題点と基本的方向、そして各グループのテーマに応じた今後の運営についての発表行われて、意見の共有化が図られた。

（詳細は三頁参照）

ゲスト講師続々

記念シンポジウム報告書に向けた総括が進行しているが、並行して全体例会および部会においてゲスト講師を招き、議論を深めている。

○全体例会

五百旗頭真氏が四月二十日の全体例会において、昨年のグランドシンポジウム第三日の基調講演を補完する「世界の中の日本の役割」をテーマに講演。

（五・六頁に要約掲載）

○歴史部会

五百旗頭薫氏（東京大学教授）が、ゲスト講師として、「近代世界にとっての条約改正問題」をテーマに講演。（三月二十一日、八頁に報告掲載）

横井勝彦氏（明治大学国際武器移転研究所長）がゲスト講師として、「武器移転の世界展開と日本の位置」をテーマに講演。（四月十七日、八・九頁に報告掲載）

○グローバルジャパン研究会

石井一也氏（香川大学教授）がゲスト講師として、「ガンディーと近代：コンヴィヴィアリティを軸として」をテーマに講演。（三月十八日、十頁に報告掲載）

佐野利男氏（元デンマーク大使、軍縮大使）がゲスト講師として、「国際社会から見た日本と今後の進路」をテーマに講演。（五月二十日、十・十一頁に報告掲載）

終わりでなく始めである
シンポジウムを反芻しよう！

泉　三郎

設立二十年記念のグランドシンポジウムから二百日が過ぎた。

壮大なテーマを掲げて三日間、アマチュア集団にしてはよくやったと思う。諸先生方もよく協力してくださったし、わが会員の発表者も熱意をこめて真摯に報告してくれた。とりわけ準備から当日の設営・運営までの裏方の活躍は目覚ましかった。

もっとも、シンポジウム自体については厳しい批判もある・・・看板に偽りあり、詰め込みすぎて消化不良、脱線・繰り返しが目立つなどなど。私自身にもその反省があって、無茶をやったなあ、との思いがズシリと重い。

そんなこんなで、終わって三ヶ月はほとんど虚脱状態だった。疲労困憊、挫折感もあって何もする気がわかなかった。しかし百日を経た頃から、ようやく変化が見られた。すこし気力がもどってきたのである。

そこで、三日間のテープを聴くことから始めた。基調講演、個々の発表、パネルデスカッション、アトランダムに聴いてみた、にわかに面白くなってきた。三日間、私はず～と会場にいたし聴衆の一人だった。にもかかわらず、内容を殆ど聞いていなかった、進行や運営、人の動きに気をとられて聞くことが細切れになっていた、全体としてちゃんと聞いていなかったことに気づいた。

テープを独り静かに聞いてみると、新しい発見、論点、重要な課題が、いろいろ提示されている。このままにしてはもったいない、申し訳がない、反芻し深掘りし、きちんと応答していかなくていけない。通り一遍の読みや聴講で済ませてはいけない、もっと読み込み聞き返すことが肝要だと思った。

顧みれば二十年という歳月はワンサイクルである。当会もワンサイクル終えて、新しい始まりの時なのだ。このシンポを反芻することで、新しい方向が見えてくると思う。幸い今はネットでそれを聞くことができる、しばらくすればテープ起こしの原稿も見ることが出来るだろう。みなさんにお願いしたい、是非シンポジウムを反芻してほしい、と。

平成28年度
年次総会

年次総会、五月二十四日に開催
設立二十周年記念シンポジウムを踏まえ
新しい陣容が固まる

総会の議長として理事・事務局長　近藤義彦氏を指名選出。定足数の確認、議事録署名人の選定手続に続き、平成二十八年度の活動報告（四頁掲載）および平成二十八年度会計収支報告（三頁下段掲載）が行われた。続いて、平成二十九年度の事業計画として各部会幹事による活動計画が報告され、続いて、平成二十九年度予算案が承認され、事務所住所の移動など定款変更も承認された。

役員全員二年の任期満了のため、定款に基づき七名の選任が承認され、設立二十年を経過して新しい陣容でスタートという意味も込めて理事および幹事全員が紹介された。

泉代表挨拶（5月24日年次総会）

〔理事〕
泉三郎氏（理事　再任）、塚本弘氏（理事　再任）、石垣　禎信氏（理事　再任）、近藤　義彦氏（理事　再任）、小野　博正氏（理事　新任）、岩崎　洋三氏（理事　新任）、西田　親行氏（監事　新任）

なお、泉三郎理事の理事長就任が、塚本弘理事の副理事長就任が承認され、新任となる副理事長（塚本弘氏）および新任理事となる小野博正氏と岩崎洋三氏の挨拶が行われた。

副理事長
塚本弘氏の挨拶

発足後間もなく、米欧亜回覧の会に参加してから、二十年になった。三回のシンポジウムにも参加したが、今回のシンポジウムの大きな特徴は、初日の岩倉使節団の群像の発表のように、会員の皆様方の活躍が目立ったことだ。団員の一人一人の帰国後の業績を振り返ると、実に多彩な活躍をしておられることが明らかになり、保坂正康氏は岩倉使節団の事典を作ってはどうかとコメントされた。芳賀先生が述べられたように、歴史を学ぶことは、未来を考えることに繋がると思う。

この度、副理事長に就任しましたが、泉理事長を支えつつ、シンポジウムの出版、各部会のさらなる活動、特に、新しいメンバーの勧誘などに、努めたいと思う。これからも、万機公論に決すべしの精神で、侃々諤々、大いに楽しく論じ合いたい、よろしくお願いいたします。

新任理事
小野博正氏の挨拶

当会には、十周年の直前に入会したので、他の理事の皆様に比し、まだ若輩者である。理事に推薦頂いたのは、「実記を読む会」、「現未来部会」（現在の、グローバル・ジャパン研究会）に比較的よく参加し、歴史部会の幹事を長らく務めていたためかと思う。

当会の課題はいくつか考えられる。高齢化による会員減少を、どうして押しとどめるのか、若手会員誘致のための、i-Café Music and Lectureとか、実記を読む会の、学生や一般の方々への拡大・拡充も永年の懸案となっている。ホーム・ページの改修・拡充やミュージアム構想による啓蒙活動の推進、そして、岩倉使節団関連資料収集と充実化、関連研究の進化を図ることも、昨年のシンポジュームにて、芳賀徹氏や保阪正康氏に指摘されたことである。歴史部会でも、使節団関連人物論をさらに深めていきたいと思っている。少しでも、これら課題や目標の推進に貢献できたらと思い、、会員の皆様の更なるご指導ご鞭撻のほどをお願い申し上げます。

新任理事
岩崎洋三氏の挨拶

当会とは設立準備段階からのご縁で、昨年暮れの二十周年記念シンポジウムで一段落と思ってたところに、今回理事の役割が回って来たので、正直戸惑いを隠せない。二十年の間に世の中は大変貌を遂げ、会員は多くが高齢化する一方、新しく入会される方も少なくないという状況下、会として何をなす

新しい役員および担当

理事（兼幹事）
泉三郎（理事長、会代表）
塚本弘（副理事長、グローバルジャパン研究会）
石垣禎信（総務）
近藤義彦（事務局長）
小野博正（歴史部会）
岩崎洋三（英書輪読会、I-café）

監事
西田親行

幹事
小坂田國雄（実記を読む会）
畠山朔男（グローバルジャパン研究会、i-café）
小泉勝海（グローバルジャパン研究会）
植木園子（i-café）
中山進（広報、メディア委員会）
吉原重和（メディア委員会、i-Café）
多田直彦（メディア委員会）
政井寛（メディア委員会）
難波康熙（関西支部）
森本淳之
小松優香
庵原義文
古俣美樹（事務局）

顧問
山田哲司
出井亜夫
吹田尚一
桑名正行

べきかは、易しくないと思っている。

これまで関わって来た中で、英訳「The Iwakura Embassy1871 - 1873」が出版された直後の二〇〇三年に立ち上げた「英書輪読会」が十五年も続いていることや、二〇一四年に始めた「i-Cafe」が毎回コンスタントに三十～四十人を集め、新規入会者にも恵まれる様になっていることには、何がしかヒントがあるかも知れないと思っている。

皆さんのご希望ご意見を拝聴し、多くの会員が満足し、歴史に学んだことを啓蒙できる、風通しの良い会になるように微力を尽くしたいと思います。お力をお貸しください。

ブンブンミーティング後の記念撮影（5月24日）

ブンブンミーティング

総会議事の終了後、会の課題や今後の運営について、率直な意見交換をやろうということで、テーマ毎にグループに分かれて、ブンブンミーティングを行った。歴史部会（担当：小野）、グローバルジャパン（担当：畠山）、メディア委員会（担当：吉原）、の三つに分かれて論じ合った。それぞれに議論を重ね、問題点と基本的方向について討議した。なお、「実記を読む会」は担当者が欠席であったので、別に機会を設けて話し合うことになった。

記念シンポジウム報告書編集委員会立ち上げ

幹事会における決定により、五名による編集委員会が立ち上がった。委員は、泉三郎、塚本宏、山田哲司、小野博正、小松優香の五名。編集責任を泉、事務局を小松が担当することになった。

現在、シンポジウムの報告書については、三日間の基調講演をはじめとしてパネルディスカッションまですべてのテープ起こしが終わり、報告者の発表部分や草稿も含め、それらに基づき一次原稿を作成中である。まだいくつかの部分が欠落しているがほぼ揃って来ているので、いよいよしかるべき出版社と交渉する段階に達し、プレゼンのための調整作業をすすめている。出版事情は厳しく資金事情もあり予断は許さないが、諸先生の内容ある講演や会員諸氏の思いのこもった報告だけに、それにふさわしい報告書ができればと願っている。

（泉記）

久々のブンブンミーティング

米欧亜回覧の会　平成28年度（2015年）　会計収支報告（単位:円）

平成28年度

特定非営利活動にかかる事業
会計収支計算書

平成28年4月1日から
平成29年3月31日

特定非営利活動法人
米欧亜回覧の会

収入の部	
入会金（正会員６名）	30,000
年会費	494,000
寄付金	336,000
講演会等事業収入	4,411,500
その他（受取利子）	58,714
当期収入合計	5,330,214
支出の部	
講演会等事業費	2,399,193
会報発行印刷代	49,906
郵送費・託送費	148,107
電話・通信費	26,280
会議費	1,502,227
事務用品費	170,692
事務委託費	619,000
当期支出合計	4,915,305
当期収支バランス	414,909
期首現金・預金残高	1,405,844
当期収支バランス	414,909
期末現金・預金残高	1,820,753
（内訳）	
手許現金（事務局合計）	(1,527,782)
郵便貯金	(292,971)

＊20周年記念事業シンポジウム関連の収支は収入4,411,500円、支出 4,021,116円、差引390,384円。

米欧亜回覧の会　平成28年度（2016年度）　活動報告

（平成28年4月～平成29年3月）

	全体例会	実記を読む会	英訳実記を読む会	歴史部会	近代史研究会	グローバル・ジャパン研究会	広報メディア委員会・企画委員会	i-Café	関西支部
平成28年 4月	11第79回例会（4/17） NPO法人年次総会　＋ 20周年記念シンポ討議 於 日比谷図書文化館	4/14 特別報告 『万葉集の心と 岩倉使節団』 西井易穂氏	Sir Ernest Satow, A Diplomat in Japan 輪読会 4/20『Ch.24 Outbreak of Civil War (1868)』 市川三世史氏	4/18 『明治民法制定の経緯と その特徴、現在に つながる意味と問題点』 根岸謙氏	4/26 『石原莞爾 他』 吹田尚一氏 『北一輝』 半澤健市氏	（4/17） （五百旗頭真氏骨折のため 年次総会第2部に予定 されていた講演会は中止）		4/26 i-Café-lecture@ 日比谷図書文化館 『岩倉使節団の 米欧回覧』米国編	4/27 実記輪読： 第3編 48巻 （ベルギー）
5月		5/27 第8~10章 『シカゴ鉄道の旅』 『シカゴからワシントンへ』 『コロンビア特別区総説』 小坂田國雄氏	5/11 『Ch.25 Hostilities begun at Fushimi』 樫原知子氏	5/16 『明治期の西洋文明の 受容について』 ウィリアム・スティール教授	15/10 『山本七平 他』 持田鋼一郎氏 『トヨタの経営と豊田家』 森本淳之氏 5/17 『文明史的遺産としての 明治』 澁井一博教授	5/14 『ホームレス状態を生み ださない日本へ～14歳で ホームレス問題に出会っ て19歳で起業して』 川口加奈氏		5/31 i-Café-lecture@ 日比谷図書文化館 『岩倉使節団の 米欧回覧』英仏編	
6月		6/24 第11~13章 『ワシントン市の記　上』 『ワシントン市の記　中』 『ワシントン市の記　下』 芳野健二氏	6/15 『Ch.26 The Bizen Affair』 小坂田國雄氏	6/20 『岩倉使節団と西洋音楽 ～国家と音楽』 奥中康人教授		6/14 『持続可能な社会とは？ ～ナショナル・トラスト運動 を通じて～』 関　健志氏		6/28 i-Café-lecture@ 日比谷図書文化館 『岩倉使節団の 米欧回覧』その他編	
7月		7/22 第14~15章 『北部巡覧の旅　上』 『北部巡覧の旅　中』 『北部巡覧の旅　下』 岩崎洋三氏	17/13 『Ch.27 First Visit to Kioto』 大森東亜氏	7/19 グランドシンポジウム 第1日目 プレゼン検討会	7/12 『日本近現代における"大 正時代"の意義』 成田龍一氏 7/28 『満州国と2.26事件』 古海建一氏&香田忠雄氏	7/16 『The Charms of Japan ～言祝ぐ日本～』 ピーター・マクミラン氏 7/30 『世界の中の 日本の未来』 五百旗頭真氏	会報82号	7/17 i-Café-music @シェア奥沢 『岩倉使節団の 米欧回覧』総集編～訪問 各国の音楽 森美智子・武藤弘子 i-CaféSingers・i-Café Strings	7/13 実記輪読： 第3編 49巻 （ベルギー）
8月		（夏休み）	（夏休み）	（夏休み）	（夏休み）	（夏休み）	（夏休み）		（夏休み）
9月		9/23 第17～19章 『ワシントン市後記』 『フィラデルフィア市の記』 『ニューヨーク市の記』 大森東亜氏	9/21『Ch.28-29 Harakiri-Negotiations for Audience of the Mikado at Kioto & Massacre of French Sailors at Sakai』 赤間純一氏	9/12『安場保和～地方行 政のキーマン』 芳野健二氏 9/20『林董～五稜郭の捕 虜から外交の主役に』 岩崎洋三氏	9/27 『近代日本における ナショナリズムと アジア主義』 中島岳志教授	9/10 『日本をほぐす～ 私がシェア奥沢から 学んだこと』 堀内正弘氏			
10月		10/28 第20章 『ボストン市の記』 多田直彦氏	10/12『Ch.30 Kioto-Audience of the Mikado』 斉藤恵子氏『Ch.31 Return to Edo and Presentation of the Minister's New Credentials at Ozaka』 岩崎洋三氏	10/17 『団琢磨～三井財閥・経 済界のドン』桑名正行氏 『渡辺洪基～明治国家の プランナー』赤間純一氏	10/26 近代史研究会	（休会）			
11月		（休会）	11/16 『Ch.32 Miscellaneous Incidents -Mito Politics』 水谷剛氏	11/7 『田中光顯～明治国家の 黒幕的巨魁』 小野寺満憲氏 11/21 グランドシンポジウム 第1日目プレゼン練習会	11/15 近代史研究会	11/19 『日本資本主義の 功罪』 橋本俊詔氏	会報83号		
12月	12/2～12/4 設立20周年記念 グランドシンポジウム 『岩倉使節団の世界史的 意義と地球時代の日本の 未来像』 於 一橋講堂	12/23 英訳実記を読む会との 合同忘年会	12/21『Ch.33-34 Capture of Wakamatsu and Entry of the Mikado into Yedo & Enomoto with the Runaway Tokugawa Ships Seizes Yezo』 岩崎洋三氏	（休会）		（休会）			
平成29年 1月		1/27 第21～22章 『イギリス総説』 『ロンドン市総説』 小野博正	1/18 『Ch.35-36 1869-Audience of the Mikado at Yedo & Last Days in Tokio and Departure for Home』 樫原知子氏	1/16 『人類文明5000年を 鳥瞰する』 芳野健二氏	1/19 近代史研究会	（休会）		1/22 i-Café-music @シェア奥沢 映像と音楽でたどる ≪岩倉使節団の 米欧回覧≫ロシア編Ⅱ 森田健太郎氏	（休み）
2月		2/24 第23～25章 『ロンドン市の記 上』 『ロンドン市の記 中』 『ロンドン市の記 下』 芳野健二氏	2/15 The Complete Journal of Townsent Harris 『Preface & Introduction』 小坂田國雄氏	2/20 『科学の未来を考える』 ～NHK番組『フランケン シュタインの誘惑～科学 者の事件簿、科学の闇』 を題材に		（休会）			
3月		3/24 第26～27章 『リヴァプール市の記 上』 『リヴァプール市の記 下』 大森東亜氏	3/15 The Complete Journal of Townsent Harris 『Journal 1』 岩崎洋三氏	3/21 『日本近代にとって 条約改正問題の含意』 五百旗頭薫氏	3/16 近代史研究会	3/18 『ガンディーと近代～ コンヴィヴィアリティー～を 軸として』 石井一也氏		3/5 i-Café-music @シェア奥沢 映像と音楽でたどる ≪岩倉使節団の 米欧回覧≫フランス編Ⅱ 芳野まい氏	

第80回
全体例会

四月二十日、全体例会開催
五百旗頭真氏「世界の中の日本の役割」
講演要旨

四月二十日、全体例会の五百旗頭真 熊本県立大学理事長の講演、「世界の中の日本の役割」の要旨は以下の通り。

トランプ大統領、英国のEU離脱など、世界が乱世に突入した観があるので、新しい世界の中で日本がどうすべきかを話したい

◇アメリカのリーダーの対応

歴史家なので、まず、グルーとステイムソンが戦争末期にどう対応したかを思い起こしたい。国務次官のグルーは、五月二十五日の東京大空襲の情報を聞き、一刻も早い戦争終結を目指して、五月三十日のMemorial Dayに大統領の対日声明スピーチを出してもらうべく努力する。しかし、国務省内は、反対が大多数であった。グルーは、その後、トルーマン大統領に会い、「日本人は、最後の一人まで戦い抜く、戦意旺盛な伝統を持った民族である。しかし、心の琴線に触れれば、優しく丁寧な姿勢も持っている。今必要なのは、軍事手段でなく、配慮に満ちた言葉である。日本人に響くのは、もし日本が立憲君主制を望むなら、今の皇室の下での天皇制も維持可能であるという勝者の観点を示せば、彼らは武器を置くことができる」、と熱弁を振るった。

講師の五百旗頭真氏

ビジネスライクなトルーマンだが、このときはグルーの思い詰めたような長い話をじっくり聞いて、「私自身も同じように考えていただけに、大変興味深く伺った」と答えた。そして、ペンタゴンに行って、ステイムソンなど軍の指導者達とよく相談してほしいと指示したが、まだ、時期は熟していないという結論になった。ステイムソンという人は、関東軍が作った満州国を認めないという不承認政策、ステイムソン・ドクトリンで有名な人、強面で、日本にとって怖い人、そして原爆投下の責任者でもあった。

私は、エール大学の図書館のステイムソン・ペーパーの中に、一九二八年のフィリピン旅行の帰りに中国と日本に寄った記録を見つけた。瀬戸内海の美しさについて、一枚の便箋にbeautifulという言葉が、六回も出て来る。京都には午後五時五十八分着と書いてあり、汽車が時間ぴったりに着くことに些か驚いたようだ。旅行の途中で次期国務長官になり、東京で歓迎会も開催され、吉田茂外務次官の雪子夫人が横に就く。大変な教養人で、日本の女性とは、こんなに素晴らしいのだと評価している。また、若槻、浜口、幣原など西側社会のどこにおいてもリーダーとして話し合えるような人達を育むことのできる国であり、大事にしてしかるべきだと。終戦の時における日本に対する判断の根幹は、その時に形成されたのではないかと思う。

加えて京都の寺院とか瀬戸内海の島々など、美しい風景を大事に自分達のものにしている日本社会、自然、文化に対する共感、尊敬を持っていたことも書かれていて、間違いないと思った。

ところで、京都に対する原爆投下の議論の際に、ステイムソンは、京都をよく知っている、ということは全く言わない。寧ろ、日本人の心の故郷である京都を破壊すると、戦後日本が、我々ではなくソ連に飛び込むおそれがあり、アメリカの大きな損失になると説得した。戦略論、戦後日本との友好和解がアメリカの将来にとって必要だという議論で押し通した。厳しい、切った張ったの戦の中で、なお、人間、自然、文化、そういうものの大事さを心の一角に入れながら対処したステイムソンのエピソードは記憶しておいていいのではないか。

◇利益と価値の体系

政治とは、力の体系、利益の体系、価値の体系と言ったのは、高坂正堯教授である。戦前の日本は、力の体系に没頭し過ぎた。山本五十六が揮毫を頼まれたときよく書いたのは「国 戦 好まば 必ず滅ぶ」。戦後は、それに対する反省で、平和憲法ができた。

それは当分間違った考えではなかった。ただ、冷戦後の現在、他国が日本に対して尖閣列島を奪うとか、ミサイルを打ち込む危険がある。これに対し、我々は平和的で何もしませんと言っていれば、大丈夫なのか。戦後日本は、力の体系を捨てて、経済国家として、利益の体系を中心に進んできた。また、価値の体系も大事にする国として、発展してきた。未だ賠償が終わらないうちに、ODAを開始し、途上国の発展に力を注いできた。一九六五年には海外青年協力隊を開始した。日本の青年海外協力隊の人達に会うと、先人が現地の人々と一緒に汗をかいてきたという蓄積のお陰で我々は信用を得ている、これを続けて行こうと思う、これが、日本の若者達の意見だった。

五百旗頭真氏講演会（4月20日）

一九七七年、福田首相は、マニラでのアセアン首脳会議に招かれて福田ドクトリンというスピーチをする。第一に、日本は経済大国になっても軍事大国にはならない。第二は、日本はアジア諸国民との間で心と心の触れ合う友情を築く。heart to heartというのが、東南アジアで明記され、唱えられた。第三に、インドシナ諸国を中心に東南アジア全域での経済発展に力を尽くす。この三つのことを

言って大変に感銘を与えた。政治は、こういう大きな枠組みを作ることが大事である。

◇乱世の時代の日本の対応

要因の一つは、イスラム過激派。もう一つは、中国の大国化。日米欧は、二つの大戦を経て、国連体制を作った。中国は、アヘン戦争以来、西欧列強の帝国主義や日本の侵略に苦しんできたが、八路軍その他が頑張って跳ね返してきたという歴史認識。軍事力というのは、聖なる剣という考え方。九十年代から軍拡を進め、国益に資するものであれば、力を使うのは、当然という考え方である。ロシアも同じ考え方。

その中で、日本がどう対応していくか。北朝鮮も中国も力を振りかざして現状を変えることを是とする国だけに大変である。現状を変えようとすると不幸かつ損なことになると相手に思わせるだけの力を日本が持っていることも大事だし、日米同盟も大事、さらに多くの国との友好関係を築くことも必要である。安倍首相が長期間在任することによって、これまで、六十六ヶ国を訪問し、マルチの会議でも、前向きの提案や協力を打ち出すなど、頑張っているが、こうした総合的な外交力を国防が難しい中でしっかりと発揮していくことが一つ。

もう一つは、日本の財政赤字は、GDPの220%、ギリシャの140%をはるかに超えている。貯蓄総額に見合っているので、外国の投機筋の餌食になっていないが、増えていけば必ず破綻する。増税は不人気だが、支出に見合った財政再建をやらなければ必ず破綻する。それを率直にやってみる勇気が必要だと思う。

そして第三には、この国では、必ず起こる大災害。これに対する答えは、国民共同体以外にない。起こったときには、それ以外の地域が全力を挙げて支援する。その実態が随分でてきた。

首都直下型地震に対処するには、一極集中を是正し、地方を充実させることが必要。熊本県下を回ると、観光や農業牧畜などの学科を一つでいいから作ってほしいと言う声が多い。高校を卒業すると二度と戻ってこないからだ。地方という足が無くなってしまうと東京という頭が潰れる。東京に若者は集まるが、東京は子供を育てる環境ではなく、東京の生産力は弱い。オリンピックの後、日本の大きな再配置を行ない、地方のコミュニティーをもう一度活性化させていくような大きな事業への前向きな努力が必要なのではなかろうか。

（文責）塚本 弘

実記を読む会報告

担当幹事　小坂田 國雄
Tel&Fax 044-987-1531
osakadakunio5256@jcom.home.ne.jp

■第二百十二回

三月二十四日開催、第26巻、27巻　リヴァプールの府（市）の記

はじめに英国回覧の日程を通覧。使節団は明治五年七月十三日リヴァプールからロンドン入り後、十一月十五日ロンドンを発つまで実に百二十二日間、英国に滞在する。主要な十二都市を巡り、政治社会制度を含め、産業、工業を中心に英国の国力の基盤を具に視察し記述する。

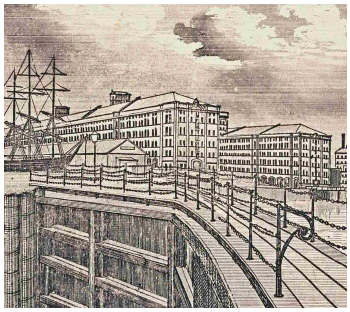
リヴァプールは当時、英国第二の都会であり、国際貿易港としてアメリカの繁栄とともに栄え港の賑わいは世界一と見た。ドック（船渠・港湾）は約十キロに及び、中には道路が走り、鉄道まで敷かれている。リヴァプールから食糧と製造原料が各州に輸送のうえ加工され、各州の工業製品がリヴァプールから積み出されその利益により富が蓄積されると英国経済の仕組みを解明。しかしリヴァプールが十七世紀から十八世紀にかけてアフリカの黒人奴隷を新大陸のアメリカに商品として売る「三角貿易」の拠点であったことには触れていない。現在は「海商都市」として世界遺産に登録され、使節団が見学した施設が現在も残る。

久米は晩年（九十才）の『回顧録』で父親と佐賀藩の長崎水門を見学したことを回想し、リヴァプールの水門との構造的差異を深く印象づけられたと記す。さらに商品取引所、六階建て穀物倉庫とバケットコンベア、乾ドック機能と大型クレーン、造船所、商船学校、汽車製造会社等を見学。特に造船所では船全体の構造を設計部で定め、製図が大切であること、製図を人体の脳にたとえ工業の基本であると久米は理解した。製品をつくるときは、計画開発段階に総経費の二分の一位を投ずる周到さが必要だと記す。日本人に深く考えることを嫌う傾向のあるとの指摘は今日でも改めて傾聴に値するように思われた。

報告ではそのほか、リーズ・リヴァプール間の運河が一七七四年に全長二百四キロ、英最長の水路が造られたことに加え、現在のイギリスの内陸水路網と併せてボートにより運河水路で過ごす大型観光モデルを紹介した。

今回、リヴァプールに因みビートルズをCDにより十七曲、英和対訳歌詞コピー付きソニー・オーディオで聴く時間を初めてとり、幸い好評でした。

（大森 東亜）



リヴァプールのドック水門と穀物倉庫（『実記』）

■第二百十三回

四月二十八日開催、英国編第28巻、漫識特府（マンチェスター）の巻上・下

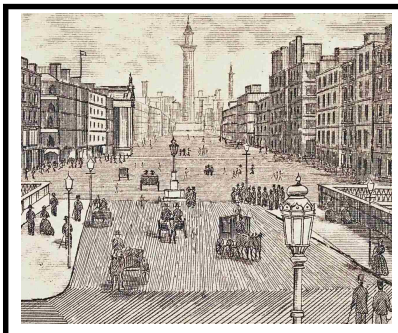
今回は参加者全員で、久米実記原文を交互に輪読する。

一八七二年九月二日、一八三〇年に英国で最初に敷かれた鉄道線で、リバプール市を発ち、英国第三の都市マンチェスター市に向かい、ランカシャーのセントヘレン村にあるガラス製造工場を見学する。久米はここで、七頁にわたり延々と、ガラス製造工程や、原材料、触媒、そして自分の所見を含めて詳細を極めた描写を展開する。日本の陶器に対し、英国ではガラスを多用し、陶器はむしろ貴重品であると述べる。久米の故郷は有田焼の産地で、その製造過程に通じている故、似たような工程のガラスに興味津々。見学を終え、再び汽車

で、マンチェスターへ。駅で市長らの出迎えを受けて、クインズホテルに投宿。夜、芝居に招待される。三日は、主産業の紡績工場を見学する。綿紡績でマンチェスターは大都市に成長したが、八、九年前のアメリカ南北戦争時には、綿花がアメリカから入らず、工場閉鎖と、失業に見舞われたと米国の奴隷廃止の影響がここにまで及んでいた。綿花の代替地がインドであった。次に、フィットウオール社の製鉄場を見学。一八三七年より、鋼、鉄、大砲、砲弾、砲車、輪台、各種機械、鋳物を生産する。各製造工程をここでも精述する。部品の規格化が産業革命にとって重要と知る。裁判所、牢獄を見学。会員の遠藤さんのご先祖が、海外留学後、日本の監獄整備に携わったと知る。四日、日曜日で、店舗も閉まり、休日を公園や近郊散策に費やす。

五日、禁酒禁煙のテンペレント協会の方が来る。ここで久米は、東洋の男子、酒豪を競い、淫欲を風流とし、女子の煙で媚悦する風を戒めている。次の更紗工場では、触媒に牛羊の糞汁を用いるのに感心する。再び、紡績工場を見学して、精密なる工程描写に費やす。久米の得意技である。この日、幹事の小坂田氏より、英国ＢＲＥＸＩＴに関する資料を提供される。

（文責）小野　博正



グラスゴーのメインストリートの一つ（『実記』）

■第二百十四回

五月二十五日開催、参加者六名。第30・31章

一行は九月七日マンチェスターから鉄路でグラスゴー市（以下Ｇ市）へ。当時Ｇ市はスコットランド随一の人口四十七万人を擁する工業都市。久米はその活況ぶりを、夜中でも工場の煙突が火を噴き赤々と天を焦がすようだと描写している。一行はＧ市及び周辺都市で、鉄工所、蒸気機関車製造工場、銑鉄工場、造船用鉄材等製作所、塗装工場、建造中の蒸気船、製糖工場を精力的に見学。これまで同様、久米は精密な現場記録を残しているが、唯一銑鉄工場の炉の仕組みは「ヨク辨知スル所ニアラズ」と記す。企業秘密だった故か。一方株取引所、商工会議所、同業組合の見学や関係者との接見から、久米はこれらの機関の役割と意義を解説。さらに久米は英国の政治特性にも言及し、ロンドンのウェストミンスター周辺では王権の行き届く立君制、シティや各都市では企業の自由が確立した共和制、田園地帯では貴族専制と、三様の政治が並立している根底に、自由の重視、法律の作成、遵守の仕組みが存することを指摘する。

Ｇ市で一行は貴族院議員ブランタイア氏宅で食事、宿泊の接待を受けたが、滞在最終日に同氏の案内で氏所有地内の屋内外施設や設備、作業人の職能等の見聞から自給自足の規模の大きさを実感する。ここから久米は西洋では借地借家は賤しまぬが、田宅所有者を豪富の家とみる。これは日本で高禄のある家が尚ばれるのと変わらぬが、歳入が百万を超える者の豪奢さは国王を凌ぐと感嘆している。

十日にエディンバラ市（以下Ｅ市）へ移動。十四日まで市内ホテルに滞在する。Ｅ市はスコットランドが独立王国時代の首都で人口十九万五千人。アテネに擬せられる風景の美しさを称えている。中一日の休息後、裁判所、産業博物館大学、宮殿、教会を見物。王宮関連でメリー女王の名高い悪行を野次馬的に詳述しているのは人間的というべきか。一方、蒸気牽引車製造工場、ラバー工場、硬質ゴム工場、製紙工場を見学し各製作工程を例によって詳述。翌日は一日がかりで船で灯台を見学し、灯台の建設工程、構造、保守の仕組み等を学んでいる。

（遠藤　藍子）

英書輪読会
（The Complete Journal of Townsend Harris, First American Consul and Minister）
担当幹事　岩崎洋三
iwasakiyz1116@gmail.com

■第三回

四月十九日開催、The Complete Journal of Townsend Harris Feb. 19 ~ Apr. 21, 1856 (p. 58~p. 96)

一八五六年二月二十二日　ペナンに上陸。当地で英アモイ領事パークス夫妻と会う。パークスはタイとの通商条約批准書交換のためタイ国訪問途上にあった。

三月十日、インド・アウド王国が東インド会社の支配下におかれたとの報を受け、ハリスはインド英総督がインド・アウド王に失政の罪を負わせているが、英国の工作があったのではないかと記す。この間三月二十二日、通訳ヒュースケンがニューヨークから米艦サン・ジャシント号でペナンに到着、ハリスと合流。四月二日、サン・ジャシント号でペナンを発ち、四月四日～八日シンガポールに滞在し、四月十三日、メナム河口に着き、船上からタイ国外務大臣に手紙を書くとともに、バンコック在住の米人宣教師マトゥーン牧師に通訳依頼の手紙を書き、協力してもらう。四月十五日タイ国総理大臣が、マトゥーン牧師とともにハリスを迎えに来る。総理大臣の助言で第一王および第二王に手紙を書く。四月二十一日、タイ国旗と国王旗をつけた小汽船によりバンコックのハリスたちのために新築された建物に向かう。途中の接待所で食事が供されるとともに、礼砲が放たれ、米軍楽隊により米初代国歌、コロンビア万歳が演奏され、タイ人を感動させる。

（大森　東亜）

■第四回

五月十七日開催、Journal of Townsend Harris (April 21 - April 30, 1856 : Page 96/Line 10 ～ Page 129/Line 01)

ハリス一行は四月二十一日にメナム河を遡上し、準備完了したバンコックの居所に入居。

外務大臣プラ・クランングが出迎えた。今後の交渉の通訳は、マトゥーン博士となる。晩餐会の食事で七名がコレラに罹病するが、翌日に回復。

国王を悩ましているパークスからの書簡の内容は、単な

る質問状であると説明して、受取り拒否にはならなかった。国王に対する非公式面謁を、クラングに手紙で要請。第二国王との謁見は、国王との謁見後にのみ可能であると判明。

第二国王の息子ジョージ・ワシントン殿下が来訪。マトゥーン氏から、米大統領書簡の受取りを王方貴族経由としたいと要請あり。外務大臣、総理大臣、王弟殿下に面会の要ありと知らされ、四月二十三日に訪問。

クラングから、合衆国を、他国との紛争時に条約上で仲裁者としたいと要請あり。調停者であれば受諾と述べる。同一要請を、総理大臣クン・プラ・ナイ・ワイからも受けた。王の弟、クロム・リュアング王室医師長は、クラング宛の手紙「王への謁見前に会うべき貴族」作成を推奨。

国王との謁見は再延期され、五月一日となった。

米国人に好意を持つ主席顧問官ソムデット・オーング・ノイを訪問。米仏両政府は得た情報に基づき、目指す条約の締結要求時に提携する見込みと、ウオング・サー殿下から知らされる。後刻ノイから「この相互提携」の真偽を問われたが、ハリスは「当時本国に不在のため知らぬ」と回答。「シャム守旧派」ノイは狡猾で二枚舌的な表裏があり、ハリスは信頼しない。しかし彼はハリスに好印象を持ったと、ウオング・サー殿下から聞く。

以前ニールが記したシャム史のバンコックの記述には誤りが多い。バンコックには数百の旗竿が林立するため、旗竿都市である、とはハリスの所感。

四月三十日は明日の謁見のため、行列の編成を策定。

（市川 三世史）

歴史部会報

担当幹事　小野 博正

mi040031-9697@tba.t-com.ne.jp

■近代世界にとっての条約改正問題

三月二十一日開催、

本年の歴史部会のテーマ『西洋文明とは』に沿って『近代世界にとっての条約改正問題』の演題で、条約改正交渉史から見える西洋の論理を、昨年の二十周年シンポの『岩倉使節団の明治国家にもたらした〝光と影〟パネルのモデレイターを務めた五百旗頭薫氏にお願いした。参加者二十二名。氏は、二〇一〇年の尖閣問題のタイミングで『条約改正史』を発刊したのも、不平等条約問題は、今の日米安保条約における沖縄の地位協定にも通底する問題と考えている。西洋の普遍主義は、良い普遍主義も多いが、①抑圧としての普遍（半文明＝日本、中国、シャム＝政府が作れる国）②排除として普遍（未開、野蛮＝アフリカ諸国など＝植民地化）とキリスト教国など西洋の文明国との三分法で捉えて、日本は、努力すれば文明国になりうる国として不平等条約を締結させられた。然し、日本の不平等条約は、清国のように内地開放を外国に認めておらず、悪いとされる「協定関税」（関税自主権）も、日本側が税収欲しさに輸出税を自ら課するなどの面もあり、「領事裁判権」も、人と人との問題解決には大きな不都合があったとは思えない。領事裁判権が、細かい行政規則の違反にまで拡大適用されてきたことへの行政権回復への苦闘こそが、日本の条約改正交渉の四〇年も要した真相であったという。その領事権の行政権への拡大は、必然的に領事の行政能力を超え、領事権の機能不全をもたらし半ば自滅した。

日本が条約改正に成功したことは、西洋文明を揺さぶる世界史上の分水嶺ともなった。日本は古来、稲作、律令、仏教、シルクロードの文物、西洋など外国からの文明を〝まれびと〟＝よいものをもたらすもの＝普遍の受容器であった。そして、それを「日本としての方法」で日本文明化してきた。近世の職分意識＝それぞれの人が、それぞれの立場で自分の職分を守ることで切磋琢磨して文化を磨いてきた。日本は、今後も西洋・東洋の良い面を取り入れた偏らない本筋をアセットとして、世界の灯であり続けられないか。

議論は、BrexitやTrump問題、Post Truth等多岐に亘った。私には、『大隈重信と政党政治』の著者でもある氏の、明治十四年の政変で、大隈が国会開設を急いだ理由が、財政家の大隈は、国会で早く財政立て直しを決めたかった。本来、国会にも政党にも興味なく、常に政府の中心にあって、能力ある官僚に信頼して任せて、強気にわが道を歩きたかった人とのコメントは面白かった。また後日の、Post Truth 問題での登板を示唆された。期待したい。

（文責）小野 博正

■武器移転の世界展開と日本の位置（横井勝彦氏）

四月十七日開催、参加者十八名。

近代とは何であったかを問うシリーズ四回目は、『大英帝国の〈死の商人〉』の著者・横井勝彦氏（明治大学教授）を招き講演を頂いた。これまでと違った切り口から現代世界の焦眉の問題を歴史部会として見つめ直す機会となった。

五百旗頭薫氏（3月21日）

武器移転とは、武器の貿易、取引ばかりでなく兵器の運用、それに伴う技術移転、武器生産、それらに関わる国や軍の政策、企業経営等の面も広く視野に入れた概念である。

第一部では、「幕末維新期における洋銃の世界還流」が日本に至る経緯を辿る。先ず幕末維新期、武器市場が尊皇攘夷運動、倒幕開国論の中で形成されていく。グラバーが大量の洋銃や軍艦を売り込むなど輸入洋銃はおよそ七十万丁にのぼる。最先端のスペンサー銃もイギリスの制式銃となる同じ年に発注される。

大西洋三角貿易での奴隷と銃の循環関係は、十八世紀後半、主にイギリスから西アフリカへ毎年三十～四十万丁輸出され、西アフリカ沿岸部族

が銃を獲得する。部族は奴隷との交換で洋銃を獲得する一方、非奴隷部族も自己防衛上洋銃を獲得しアフリカへの洋銃輸出は拡大の一途を辿る。

その後、銃の還流はアフリカからインドに移る。高性能の銃は反英勢力にも渡るが、イギリスは武力でセポイの反乱（一八五七年）等反英戦争を制圧。東洋初のインドでの鉄道建設も植民地支配のためで各地に兵隊を迅速に送ることが主要目的であった。

米南北戦争期（一八六一年）、イギリスの海外向け銃生産は十年間三百万丁のうちアメリカには百万丁輸出された。南北戦争後、銃の自給体制ができ、大規模な海外輸出が東アジア、中国向けに展開される。

東アジアには、反植民地運動、太平天国の乱などの鎮圧を目的とした旧式洋銃が中国に流入、堆積されるとともに日本に流入する。洋銃はアームストロング砲などと共に倒幕勢力、西南雄藩の軍事力を強化し、戊辰戦争勝利に貢献した。

4月17日　泉代表（左）と横井勝彦氏（右）

第二部では「武器移転史研究と研究事例」が紹介される。幕末維新期には幕府でも地方の鉄砲鍛冶を湯島に集め洋銃の国産化に努める。この銃国産化は明治期の各地の機械工業の発展を促進する。日露戦争期には砲兵工廠での小銃生産体制の確立とともに、歩兵銃や銃弾の中国輸出が行われるようにもなる。

機関銃がイギリスに依存しなくなるのは一九三四年以後であり、軍艦の国産化は一九一〇年代以降で、本格的な国産兵器は一九〇七年、日本製鋼所室蘭工場での軍艦大砲があり、北海道炭鉱と英ヴィッカーズ社との合弁会社で製造された。航空機産業は第一次大戦後、満州事変までの間に「輸入時代」から「模倣時代」になる。その後、日本海軍航空戦力の形成とともに、一九三二年、上海事変では航空機が出陣する一方、中国においても米国から中国に航空使節団が派遣され、航空機輸出および中国での現地生産化により中国でも空軍戦力が創設される。日本の中国侵攻が本格化すると中国の米国航空機会社はインド・バンガローに転出。同地は日本占領下の米軍ビルマ攻撃の拠点となる。インド空軍を支える航空機会社もつくられ、国有化される。このバンガローへの米航空会社の転出は今日のインド重工業化の拠点となる一方、インドのシリコンバレーともいわれる産業集積地となっている。アジアにおける武器移転の連鎖として航空機製造基盤ができるのは世界伝播を知る好事例である。

終りに講演者が主宰する明治大学国際武器移転研究所が紹介される。質疑では、スウェーデン・ストックホルム平和研究所などが話題となった。

（文責）大森　東亜

■西洋近代の普遍性を問う（吹田尚一氏）

五月十五日開催、出席者二十名。

今年の歴史部会の通底テーマが、「西洋の近代を疑ってみる」ことにあるので、今回はいきなり本丸に踏み込んだ感じである。西洋近代が達成したものには普遍性・合理性があるので、すべてが正しく、非西洋的社会は西洋により啓蒙すべきとの思想に予てから違和感をもっておられた吹田氏は、既存哲学思想を掘り起こしてこれを検証する。

日本の知識人に多大な影響力を持ったヘーゲルの『歴史哲学』の進歩主義への疑問から始まり、ヤスパースの枢軸の時代―いまから二千五百年前に、シナで孔子、老子，荘子，墨子，列子が生まれ、インドでは、ウパニシャッド、ブッダが生まれ、懐疑論、唯物論、詭弁術、虚無主義が展開される。イランではドロアスター教が善と悪の二元論を生む。パレスチナでは、エリア、イザイア、第二イザイアが、ギリシャではホメロス、ヘラクレイトス、プラトン、アルキメデスが現れた。つまり、シナ、インド、西洋で同時発生的に、今につながる思想の原型が総出現した―に注目した。そして、ヤスパースは西洋の特異性としての、合理性、個、自由、普遍尊重、一神教、二者択一の二元論、人格的愛などの特徴を上げつつも、近代ヨーロッパ文明は、決して完成でも、万全でも、絶対でもなく、西洋に欠落するもの、失われたもの、それを補完するもの―つまり人間存在の根源に触れるものがアジアの中にこそあると言った。西洋とアジアの橋をつなぐのはアジアの宗教にのみ可能性があるという。

自然科学も絶対ではない。真理もまた然り。今の生活をよりよく生きるのは、徹底的歴史主義や開かれた歴史主義に活路があると吹田氏は考える。分裂した自然科学と人文学を融合し、程よい弱い合理性で満足しよう。そして、強制によらない緩やかな合意、新ぼかし主義に徹することを提唱する。

例えば、西洋普遍主義の極みとしての「アメリカ帝国の制覇とその破綻」を考えると、その成功には開かれたフロンティアが充分にあり、資源豊富で、封建制がなく、宗教の道義主義的目的と，福音主義的精神で近代の帝国となった。半面で、フロンティアや道義的目的の喪失や、ベトナム、イラクなどの失敗で破綻し、内向きのトランプを選択するに至った。

今の世界は、第二の枢軸の時代が求められる。それは地球的規模の視点に基づく、新たなる思想で、ヤスパースの言う非西洋的智恵、とりわけ仏教的世界観や東洋の気のようなもの、二元論を脱した個と全体の調和を図るホロニックや生命文明学、人間環境学など、トランスパーソナルなアプローチ、ニューサイエンスなどが考えられると。

次回六月の歴史部会では、『宗教思想からみた東洋と西洋』で、続きを考えてみたい。

（文責）小野　博正

グローバルジャパン研究会報告

担当幹事　塚本 弘
hiroshi.tsukamoto@eu-japan.jp

■ガンディーと近代：コンヴィヴィアリティを軸として（講師：石井一也氏）

三月十八日開催。

「近代」における人類による経済発展は、未曽有の物質的豊かさを実現したが、同時に資源の枯渇と環境破壊を伴い、幾多の生物種を絶滅に追いやるプロセスであった。本報告では、こうした時代におけるガンディー思想の意義をイヴァン・イリイチのいう「コンヴィヴィアリティ」（自立共生）の概念を軸に検討した。

そもそもガンディーは、機械による経済発展が、西洋諸国による非西欧社会にたいする帝国主義支配とその後の世界戦争へと展開する経緯をみて、物質主義を特徴とする近代文明批判した。「機械は近代文明の象徴で、大きな罪を代表している」。彼のいう「真の意味での文明」とは、必要物の拡大ではなく、その慎重なそして自発的な削減によるものであった。こうした姿勢は、利己心、資本蓄積、分業、自由貿易、帝国主義を是認するように展開した経済学とは大きく異なっている。

「近代」を乗り越えるためにガンディーが展開したのが、チャルカー（手紡ぎ車）運動である。この運動は、一般に低生産性、低賃金、低品質の観点から否定的に評価されてきたが、逆に高い雇用吸収力をもっていた。機械と比べて生産性の低い紡ぎ工や織工の生業を支えることは、あたかも「稼ぎのない親や子供を養うことを恵みと考える」のと同様であるとの考えにもとづいていた。

他方、ガンディーの受託者制度理論は、富者を神から財産の信託を受けた「受託者」とみなす考え方で、マルクス主義にもとづく革命・階級闘争論に対置された。このためマルクス主義者らは、これを体制擁護論として批判した。しかし、そこでは資本家にチャルカー運動を支援する負担が課せられていたことなどを考えると、富裕階級の擁護よりも貧者救済に力点が置かれていたことがあらためて理解される。

ガンディーは、これらの運動や理論を通じて、究極的には七十万のインド村落を自立させることを目標としていた。それは、人間の身の丈に合った簡素な協同組合的社会である。「独立インドが泣きうめく社会にたいして、その役割を果たせるのは、その何千という田舎屋を発展させ、世界と平和を保ちつつ、簡素で気高い生活を採用することによってである」。

タゴールやセンは、こうしたガンディー思想に批判的だった。センは、チャルカーが「インフレ的で資本蓄積にマイナスに影響する」とみたが、ガンディーの意図は、「資本蓄積」ではなく、人間の身の丈の経済において貧者を救済することにあった。したがって、経済発展に寄与しないことをもってチャルカー運動を否定的に評価するのは妥当ではない。

センは、グローバルな経済的繁栄によって貧困を解決するシナリオを描くが、かならずしも貧困と富裕の因果関係を明確に意識しているようには思われない。ガンディー思想に照らしてみると、持続可能な社会のためには、まず「特権的な人々」が「必要物」を自発的に削減してゆき、貧者の「自由」の拡大はそれと同時に図られる必要がある。実際、人類が生き残りをかけてグローバル化の流れをより良い方向に転換する契機は、センではなくやはりガンディーの思想において見出せる。

人間社会の経済発展と平和について考えるとき、ガンディーの次の言葉は、きわめて重要な意味をもつ。「地球は、すべての人々の必要を満たすのに十分なものを提供するが、すべての人々の貪欲を満たすほどのものは提供しない」。地球という限られた空間において、人間の間にコンヴィヴィアリティを実現するためには、グローバル社会における貧者の「潜在能力」の開発が、富者の「必要物」の削減とともに行われる必要がある。

スミスからセンにいたる経済学は、おおむね成長経済（右肩上がりの経済）において人々を養う方策を考えてきたが、ガンディー思想にもとづく新しい経済学は、縮小経済（右肩下がりの経済）においてこの課題に取り組もうとするものである。しかしその課題は、成長経済をこれまで支えてきた利己心、資本蓄積、市場メカニズム、国家主導の開発など、一連の「近代」の諸価値の対極に向かいながら、同時に「近代」において未曽有の規模に増大した地球人口を養うというきわめて困難な作業を意味する。

（香川大学 石井一也）

石井一也氏（3月18日）

■国際社会から見た日本と今後の進路（講師：佐野利男氏）

五月二十日開催、以下はデンマーク大使、軍縮大使を務めた佐野氏の報告である。

四十年の外務省勤務を終え、表現の自由を味わっている。以下は、私見である。

一・世界と日本のギャップ

①世界は日本を大国と見ているが、日本人は小国意識が強い。このため日本人は国際情勢に無関心になり勝ちである。国際的な責任を十分に果たすべし。

②国連についての過剰な評価

5月20日GJ研究会（左から4人目が佐野氏）

国連の決定についてオーソリティを感じている。しかし、United Nationsとは連合国という戦勝国が創った組織であることを念頭に置くべし。

③核武装についての認識ギャップ

日本には広島長崎の歴史的背景から核武装すべきではないと言う常識があるが、外国には日本は核保有国に囲まれているのだから核保有の可能性もあるもと考えている国もいる。

④日本国内が安全で、正直者が多いから、国際社会も安全だし、正直が大事と思い込んでいる。しかし、国際社会ではお人好しは通じない。

二．国際社会が日本に求めているもの

①はっきりと自己主張して欲しい。

②主体的に、責任をもって行動して欲しい。

それが国際社会で勝つために必須のことである。

三．国際情勢　世界全体が曲がり角に来ている。

○アメリカ

トランプ大統領　良い面は、チェック アンド バランスが機能していること(大統領令を裁判所 が否認)、軍事面でマチス、マクマスターなど専門家に任せていること、伝統的な共和党路線にシフトしていること。ただ、奇抜なディールをする懸念がある。

○中国

軍事費が二十八年間で四十倍。しかも、透明性がなく、軍の中にも、一部には、習近平の影響力が十分に及んでいないと見られる。

○北朝鮮

ハリス太平洋司令官は、レジーム チェンジは求めない、金正恩の政権崩壊は求めない、三十八度線を越えない、再統一を急がないなど4点について述べている。

四．今後の進むべき道

①リスクマネージメント

日米韓で同一歩調を取り抑止力を強めること。

②基本的価値

自由、民主主義、市場原理などを粘り強く主張すべき。

③アジアアフリカ諸国の模範国

④ポール クローデル駐日仏大使(1921～1927)の言葉「日本人は貧しいが高貴である」

サウジアラビアの公使の際、「日本は近代化に成功したが、伝統文化も守った。どうしてそれが可能だったのか？」「日本は伝統的な価値を守るために子供たちに何をどの様に教えているのか」との質問。自分は、近代化に専念して、伝統文化は必ずしも守れていなかったと思うが、相手は、そうは思っていないようだ。

（文責）塚本弘

i-café-music&lecture 報告

担当幹事　植木園子

sono.ueki@gmail.com

■i-Cafe@シェア奥沢「岩倉使節団のアメリカ回覧Ⅱ」

五月二十八日開催、参加二十七名。

第一部「映像とお話」では、DVD第二章「新しい国アメリカ、大陸横断の旅」のサンフランシスコ到着部分を上映後、十二月のシンポジウムにもご出馬いただいたプリンストン大学名誉教授マーチン・コルカットさんに「岩倉使節団を歓待したサンフランシスコ」をお話しいただいた。

「米欧回覧実記」の英訳者で、岩倉使節団の米国経路を隈なく辿っていた同氏は、使節団に随行したサンフランシスコ出身の駐日公使デロングが主導したサンフランシスコ政財界の歓待振りが地元の新聞によって詳細に報道され、それらが電信によって翌日にはニューヨーク、更にはヨーロッパまで伝わったことが、その後の岩倉使節団の旅路を円滑にしたと、数々の新聞記事を読み上げながら興味あるお話しを英語でご披露いただいた。

当会初めての英語講演だったが、終わってからの質疑応答も活発で、まずは成功だった。

第二部「ミニ・コンサート」では、お馴染みのソプラノ森美智子さんと武藤弘子さん、そしてi-Café Singersが♪Over the Rainbow、♪Tonight、♪Shenandoh等アメリカの歌を植木園子さんのピアノ伴奏で披露した。

第三部　交流会ではシェア奥沢キッチンマスター立山さんお手製のハンバーガーやスペアリブ等アメリカ料理とワインで、コルカットさんを中心に大いに語り合った。

（岩崎洋三）

i-café@シェア奥沢（5月28日）

岩倉使節団が第一歩を記したサンフランシスコで大歓迎され、それを詳細に伝えた地元の新聞記事が、瞬時に世界に伝わったことが岩倉使節団成功の大きな要因としたコルカット先生のお話の一部を紹介します。

マーティン・コルカット氏
（プリンストン大学名誉教授）

The citizens of San Francisco were, by 1872, linked to the world by the telegraph, the transcontinental railroad, the steamship, and the newspaper.

Travelers bringing back accounts of their experience in the "Orient".

Readers could get the latest news from California, Chicago, the east coast, Europe, Africa, or Asia from such newspapers as the Daily Alta California, The Sacrament Bee, or the Daily San Francisco Chronicle, with its morning and evening editions.

The diffusions of the telegraph made it possible for "yesterday's news" in New York to be in "this morning's paper" in San Francisco and vice-Versa.

特定非営利活動法人

「米欧亜回覧の会」ご案内

趣　旨　この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この歴史的な大いなる旅と「実記」は、まさに「温故知新」の宝庫といえましょう。
この素材を媒体に歴史を学び、現代の直面する諸問題についても自由に語り合う会です。

会　員　趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。

例　会　年に4回、全体例会があります。

部　会　テーマ別に読む会、歴史部会、グローバルジャパン研究会等があり、映像サロン・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。

機関紙　年に4回、機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。

役　員　理事長（泉三郎）他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。

会　費　年会費6,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、仮入会希望者、学生には地方会員、準会員、学生会員の制度もあります。

事務局　「米欧亜回覧の会」事務局担当 古俣美樹
〒190-0001
東京都立川市若葉町 1-24-30-7111
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp
TEL/FAX 042-534-9295

入会申込

入会申込書はホームページと事務局にあります。新規入会に際しては入会金5，000円を頂きます。
なお年会費などのお支払いは下記のゆうちょ銀行口座への払込（振込）をご利用ください。

00180-2-580729　特定非営利活動法人米欧亜回覧の会

ホームページ

メッセージ・活動と内容・岩倉使節団・米欧回覧実記・会員のページ 等
また、書籍・ＤＶＤ案内もあります
http//www.iwakura-mission.jp
＊お知らせ欄も時々チェックしてください

＜催し案内＞

2017年 7月～9月の予定です

☆新年会日程決まる

日　時：2018年1月7日（日）11：30～（受付開始11時）
会　場：クルーズクルーズ銀座
銀座５丁目８－２０ 銀座コアビル７階
＊新年会準備委員を募集しますので、企画等準備のお手伝いをいただける方は事務局までお知らせ下さい。

☆実記を読む会

日　程：7月28日（金）
9月22日（金）
時　間：14：00～
会　場：国際文化会館401号室（会費：1000円）

☆英書輪読会

『The Complete Journal of Townsend Harris』
日　程：7月12日（水）14：00～17：00
（範囲：pp. 175-204　担当 大森氏）
9月13日（水）14：00～17：00
（範囲：pp. 205-247 担当 水谷氏）
会　場：日比谷図書文化館（会費1,000円）

☆歴史部会

日　程：７月17日（月）13：30～16：30
「江戸ナイゼイション」（小野寺満憲氏）
9月18日（月）13：30～16：30
「巴里籠城日誌」（渡洋二郎氏）
会　場：国際文化会館（会費1,000円）

☆グローバルジャパン研究会

日　時：7月15日（土）13:30～16：30
「平成時代をふりかえる
～天皇退位問題を中心に～」
（片山杜秀氏：思想史研究者、音楽評論家）
会　場：国際文化会館（会費1,000円）

☆i-café-music&lecture

日　時：7月23日（日）14:00～17:00 @シェア奥沢
「デンマーク編」（講師 佐野利男氏）
会　費：2,500 円 （軽食・飲物 付き）
日　時：7月30日（日）14:30～16:00
@湘南日独協会例会
JR藤沢駅南口湘南アカデミア　0466-26-3028
「岩倉使節団のドイツ回覧」（講師 岩崎洋三氏）

編集後記

◇年次総会報告があり増頁となりました。平成二十八年度は設立二十周年記念グランドシンポジウムがあり、活動報告の一覧表を何とか読める状態で収めるのに苦労しました（四頁）。八月を除く前半は毎月五～九回の活動報告で埋り、多くの会員がよくぞここまで準備をしてきたものと改めて思います。
◇活動の頂点は、言うまでもなく十二月のグランドシンポジウムですが、今号も増頁となった大きな要因は、活発な活動がその後も続いていることにあります。新たな論点を補うためのゲスト講師を招いた例会や部会が多く開催されています。記念事業のプロジェクトは未だ終わっていません。
◇幹事会では、三日間の録音を聞き直して、シンポジウムの運営進行に気を取られ、気がつかなかった真の価値の在処が分かってきたとの意見が多くだされています。シンポジウム三日間の全ての講演とパネルディスカッションの膨大な量の音声データをホームページで会員に公開できるように準備中です、何となく消化不良と感じている方は、聞き直してご意見をお聞かせください。（N）